

去年のNHK大河ドラマ「鎌倉殿の十三人」、面白く観させてもらいました。このドラマにありますように、鎌倉時代の武士は自分の領地を拓げ守るために命を懸けて戦っていたことを見せられたドラマです。さらに承久の乱によって後鳥羽上皇朝廷に勝利し、上皇は隠岐に流され、武士が貴族に変わって主導権を持つ社会になりました。社会の主役が変わったのです。

この鎌倉時代仏教の世界も大きく変化をとげました。承久の乱の十四年前に起きたいわゆる承元の法難によって、四名が死罪、法然上人、親鸞聖人をはじめ八名が流罪となりました。親鸞聖人は『教行信証』の中で「主上臣下、法に背き義に違し、忿りを成し怨みを結ぶ」とその時のこの裁きを行った人、つまり主上は後鳥羽上皇、臣下は上皇を取り巻く貴族、つまり貴族仏教が不当な裁きで民衆の仏教を弾在した事件であるといわれるのです。

しかしこの法難によって仏の教えが民衆に届いた。いなかの人々、地方の人達が仏教に出遇えたのです。法然上人そして親鸞聖人は流罪によって大変なご苦労をされました。そのお陰で貴族の仏教から全ての者がお念仏で救われる教えが民衆に届けられました。

